中央アジア・コーカサス

援助の柱　市場経済化と民主化、社会セクターの再構築を支援

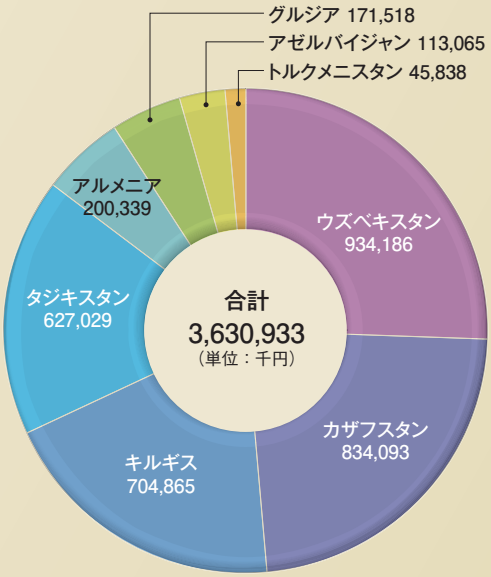
中央アジア・コーカサス地域は、アジアとヨーロッパを結ぶシルクロードの要衝として、古くから交易などによる人や物の移動が盛んな地域でした。現在、この地域には8つの国がありますが、ソ連解体にともなう独立から15年以上が経過し、市場経済化がかなり進んでいる国、依然として貧困状態や閉鎖的な政治経済体制が続いている国、民主革命による政権交代を経験した国など、国によって発展のスピードや方向性が多様化しています。

この地域は、カスピ海沿岸の石油・ガスや、ウランをはじめとする希少金属など、豊富な天然資源に恵まれています。こうした背景から、近年国際社会からの注目が高まっており、あらたなパイプラインの設置や道路・鉄道の再開発が始まっています。

しかし、その一方で大都市を除く地方の生活は厳しく、貧困削減や失業対策が重大な課題であることには変わりありません。各国が独立国としての体制を確立していく一方で、地域共通の課題（民主化、市場経済化に即した制度の確立など）や、国境を越えて取り組むべき課題（交通・輸送ネットワーク整備ほか）など、地域内協力を進める必要性も高まっています。

JICAは、各国の発展段階を考慮しつつ、市場経済化政策への助言や人造り、基本的なインフラ（道路など）の整備、社会セクター（保健医療や農村・貧困地域の開発など）の再構築に向けた支援を行っています。また、この地域と日本の協力の枠組み「『中央アジア+日本』対話」で協力の柱として掲げている、産業振興や地域内協力を進めるための活動も実施しています。

●中央アジア・コーカサス各国への協力実績
（2007年度）



＊上記グラフの金額は、二国間協力実績です。国をまたぐ協力などを含むアジア地域（東南アジア、東アジア、中央アジア・コーカサス、南西アジア）全体に対する協力実績は、45,121,925千円です。

開発の現況

躍動するシルクロード地帯

ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタンの5カ国からなる中央アジアは、ユーラシア大陸のほぼ中央に位置し、北はロシア、東は中華人民共和国、南はアフガニスタン、パキスタンなどの国々に囲まれています。コーカサスは、この中央アジアの西側にあるカスピ海を挟んで反対側にあり、アゼルバイジャン、アルメニア、グルジアの3カ国からなっています。

これらの地域は、1920年代にソ連に組み込まれましたが、1991年、その解体にともない独立を果たしました。古くはオアシス地帯を東西に結ぶシルクロードの要衝であり、両地域あわせて、面積約420万km²、人口約7500万人を有しています。

宗教的には、中央アジア5カ国およびアゼルバイジャンでは生活文化の上でイスラム教への回帰が見られるものの、各国とも政教分離政策を採用しており、イスラムの規範は必ずしも厳格ではありません。一方、アルメニアとグルジアでは古くからキリスト教が広く普及しており、固有の言語や文字を有するなど独自の文化圏を形成しています。ま

た、民族構成はトルコ系、スラブ系、ペルシャ系など、非常に複雑です。

東アジアから中央アジア、中東にかけた一帯は“不安定の弧”といわれています。その真ん中に位置する中央アジア･コーカサス地域が安定し、経済･社会が適切に発展することは、国際社会の平和と繁栄に大きく寄与することになります。そのため、日本もこれらの国々の独立以降、積極的に支援してきています。

多様化する政治経済

各国とも独立以降、市場経済化を進めてきましたが、天然資源の有無や改革のスピードの違いなどから、経済発展の差は大きくなっています。カザフスタン、キルギスおよびコーカサス3国は、貿易自由化、規制緩和、国営企業の民営化などの構造改革を積極的に進めています。カザフスタンとアゼルバイジャンは、カスピ海の石油開発を背景に、近年急激な経済発展を遂げています。

このカスピ海産の石油を輸送するBTCパイプライン（アゼルバイジャンのバクーからトルコのジェイハンまでを結ぶ）輸送ルート中央に位置するグルジアは、2006年にこのパイプラインが完成したため、今後は輸送収益による経済の好転が期待されます。キルギスは経済の回復や財政の堅実な運営により、債務指数の改善が見られます。小麦価格の高騰などによる物価上昇が見られるなか、経済成長を継続させることが課題です。

一方、ウズベキスタンとトルクメニスタンは、このような急進的改革プログラムとは一線を画し、独自の漸進的な経済改革路線を歩んできています。タジキスタンは、数年に及ぶ内戦という困難を乗り越え、1997年の和平合意、2000年の議会選挙の実施を経て、2002年に貧困削減戦略書（PRSP）を策定（2007年に改訂し、現在はPRSP2を策定）し、経済改革に向けた動きを着実に進めています。

この地域の主要な産業は、天然資源を除くと、農畜産業とその産物を原料とする食品加工です。中央アジア地域の農業は、カザフスタンを中心とする天水畑作農業（小麦、大麦）および牧畜と、ウズベキスタン、トルクメニスタンを中心とする大規模灌漑による綿花栽培に代表されます。コーカサス地域はおもに地中海性気候に属しており、ソ連時代から有名なアルメニア産コニャックとグルジア産ワインに代表されるように、それぞれの気候･風土にあった農業が行われています。

各国とも市場経済化にともない、農畜産業分野では、ソ連時代にコルホーズ、ソフホーズと呼ばれた集団農場が解体されました。それぞれの国で取り組みは異なっていますが、それらに替わる新しい生産･加工、流通販売などの適正なシステムをつくることが、依然として重要課題となっています。

現地農民に果樹栽培技術を指導する専門家（ウズベキスタン「フェルガナ州果樹栽培技術向上事業」）

民主化と国際関係

旧ソ連に属していたほとんどの国では独立以降も、ソ連時代からの指導者が継続して政権を担っていました。中央アジア･コーカサス地域でも同様でしたが、グルジアでは2003年11月にバラ革命、やや性格は異なるもののキルギスでは2005年3月にチューリップ革命が起こり、政権が交代しました。トルクメニスタンでも前大統領の死去により、2007年2月に新大統領が就任しました。これらの国々では、概して指導者が強い権限を握っており、その交代は、国内改革の転機として注目されます。

また、中央アジア･コーカサス地域をとりまく国際情勢もダイナミックに変化しています。近年は、中華人民共和国が、上海協力機構を通じて中央アジアへの政治･経済的関与を強めているとともに、ロシアもユーラシア経済共同体の再構築を進め、この地域に対する影響力を再び強めています。2001年9月11日のアメリカ合衆国同時多発テロに続くアフガニスタン空爆に際しては、ウズベキスタン、タジキスタン、キルギスの3カ国が欧米軍に基地を提供し、中央アジアにおけるアメリカ合衆国の存在感が一時拡大しました。しかし、その後、中華人民共和国とロシアの影響が拡大し、2005年11月にはウズベキスタンの空軍基地から米軍が完全撤退するなど現地の情勢は大きく変化しています。

コーカサス地域では、アゼルバイジャンとグルジアが石油および石油パイプラインを中心に、西側との関係を強化しています。グルジアは、2003年11月のバラ革命による政権交代後、民主化と経済の自由化を急速に進めており、国際社会からも高く評価されるようになっています。その一方、コーカサス地域には、さまざまな言語、宗教、文化をもった民族が複雑に入り組んでおり、民族紛争などの発生が地域の問題として残っています。

重点課題と取り組み

あらたな地域戦略の具体化に向けて

2004年8月、中央アジア諸国を訪問した川口外務大臣（当時）が「『中央アジア+日本』対話」というあらたな枠組みを提唱し、各国との間で合意しました。この枠組みにおいて、これまでのシルクロード外交のもとで進められてきた二国間関係の強化に加え、地域共通の課題（テロ、麻薬、輸送、水・エネルギー資源、貿易、環境保全）に対する地域内協力の促進に協力することになり、さらにアフガニスタンなど周辺域外国との連携促進を支援することになりました。

中央アジアに対する協力

JICAは、「中央アジア+日本」の地域内協力を推進しつつ、中央アジア地域の自立的な発展を支援するとの観点から、①市場経済化支援、②社会セクター再構築支援、③インフラ整備、④地域内協力の促進の4つを重点分野として、協力を展開しています。

研修会の模様（キルギス「IT人材育成（国立ITセンター）プロジェクト」）

市場経済化支援では、中小企業振興、世界貿易機関（WTO）加盟支援、法整備支援、金融制度改革などの制度整備や人材育成を行っています。また、ウズベキスタン、キルギス、カザフスタンに「人材開発センター（日本センター）」を開設し、市場経済化に貢献する人材を育成するビジネス講座や日本語講座、相互理解促進事業など、市民に開かれた“顔の見える協力”を実施しています。

社会セクターの再構築に向けた支援では、保健・医療や教育に関する制度改善、技術指導や機材の整備のほか、看護師などの青年海外協力隊員が、国内各地に派遣されています。

インフラの整備については、給水などのインフラ施設の維持・管理能力向上に向けた制度整備、人材育成、域内外をつなぐ道路整備などの協力を実施しています。道路整備の協力などは、地域内協力の促進にも大きく寄与するものです。

コーカサス3国に対する協力

コーカサス3国に対しては、貧困削減と生活水準向上への取り組みを支援するため、①所得向上と雇用促進、②公共サービスの質とアクセスの向上、を重点分野とし、中小企業の経営者を育成するための支援や水道分野での協力を行っています。

Front Line　タジキスタン　デフカン農場協会トラクターレンタル実験事業

協会の機能強化に貢献　トラクターレンタル（請負耕作）事業が好評

タジキスタンでは、1991年の独立後、旧ソ連時代の集団農場が順次解体され、デフカン農場と呼ばれる自営農家が生まれました。同時に農民組織としてデフカン農場協会が法的に認められましたが、農民の組織化は遅れており、各地につくられた協会の多くはその活動が講習会開催などに限られているのが現状です。大半の農家はトラクターをもたず、集団農場時代のかなり古い機械を所有者から借りるしかなく、そうした機械でさえ極端に不足しています。

こうしたなか、2005年にJICA札幌「農民組織化と農協の役割」研修を受けたファイザバード郡デフカン農場協会長は、日本の農協のように農家へさまざまなサービスを提供する協会にしたいと考え、トラクターレンタル（請負耕作）事業を計画しました。JICA事務所では、この事業を現在検討中の農民組織の機能強化をめざした技術協力プロジェクトに向けた実験事業として位置づけ、JICAフォローアップ協力事業を活用してトラクターと作業機1セットを供与しました。事業は開始後数カ月ですが、低料金で耕起作業などを請け負うこのサービスは農家に好評で、依頼に応じきれない状況です。得られた収益は、次のトラクターの購入費用積立や技術講習会の開催費用にあてられ、協会の機能強化に役立てられます。　（タジキスタン駐在員事務所）

請負作業中の供与されたトラクター